

ひろく広場

原稿をお寄せください

ひろくの記事や表紙の感想、その他なんでもOKです。原稿(500字以内)には〒、住所、氏名(ふりがな、原稿掲載は匿名・イニシャル可)、年齢、も書いてください。採用された原稿は文章を変えずに短くする場合があります。

あて先/小平市小川町二丁目1333番地
小平市次世代育成部青少年男女平等課
「ひろく広場」係 FAX 042-346-9200
byodo@city.kodaira.lg.jp

ひろく編集室はあなたにひらいています。



98歳まで一人暮らし

2年前のお正月に帰省した折、私は、父方の伯母を訪ねた。90歳の頃家を新築して一人暮らしをしていると聞いていたが、新居を訪ねるのは初めてだった。



伯母は「久しぶりだねえ」と、しつかりとした口調なので日々の生活について聞いてみた。ヘルパーさんは毎日来るが、2時間だけで買い物や洗濯を頼んでいるとのこと。食器を洗ったり、ご飯を炊くことはできるらしい。お風呂は週に2回、体は自分で洗うが転ぶと困るので、見守ってもらおうそうだ。同じ市内に息子さん夫婦が住んでいるので心配はいらないと言う。「あと2年頑張らなくちゃ

ね。」と笑う伯母の顔は清々しくて見とれてしまった。

98歳で迎えたお正月。その2か月後、彼女は天に召された。若い頃に夫を亡くし5人の男の子を育てた伯母は、ユーモアのある人だった。明るく一人暮らしを続けた先輩の暮らしぶりを私は見習いたいと思っている。

(うさぎはね子)

「ひろく」25号を読んで

「お一人様」という言葉も、ドラマで使われたりしてすっかり定着しましたよね。でも最近、なんだか軽やかなその言葉だけが独り歩きしているような、少し危うい気がするのです。

もともと「お一人様」とは、高齢者をはじめ何らかの事情により一人で生活せざるを得なくなった人たちが、誰に遠慮をすることもなく胸を張って生きていけるよう背中を押してくれる言葉、だつたと理解しています。さらにそこには、とても深い意味が込められている。それは本誌特集にあつた「ひとりだつてつながっている」社会を土台に据えない限り、所謂「お一人様」は決して成り立つものではないということです。

私も含め今一人ではない人々が「ひとりだつてつながっている」「社会を支え、そして地域や行政、近所や学校などのサポートや気遣いが機能して初めて、老若男女誰もがいざ一人になってしまったとき、前向きに「お一人様」を謳歌でき

る社会を実現することができるとはできないでしょうか。

「お一人様」とは決して他人事ではなく、また軽口にはできるはやりの言葉でもありません。少子高齢化が進み価値観も多様化する昨今、誰もがいつ一人になつても不思議ではない世の中です。「一人になつても大丈夫だよ!」そんな明るい希望を託した「お一人様」という素敵な言葉の重さを、皆でもう一度考えてみたいですよ。

私もできることからやっていきます。「ひろく」の皆さん、これからもがんばってください!

(M J 大好き)

「ひろく」を応援しています



「ひろく」は、誰にでも必要な情報が完結に記載されていて、盛り込み過ぎず簡素過ぎない良い広報誌ですね。公募市民の方が製作に携わっていると知って納得。写真や構成に主張し過ぎない地域への思いが感じられます。特に表紙は小平の街や生活の一部を切り取ったような

ホノボノとして「小平市民のためのタウン誌」という感じが二重丸◎。実は：長く小平に住んでいます、存在をまっ

たく知りませんでした(汗)。もっと主張してもいいのになつて思いましたが、そしたら経費とかかかってしまいますよね(悩)。手に取る人が増えますように陰ながら(口コミ)応援しています♪

(Y・Y)

松村艶子さんを偲んで

「憲法の精神に基づいて公民館が社会教育の地域の拠点となりその精神が広く市民に行き渡って豊かな社会になる」、公民館活動の大切さ、日本憲法の素晴らしさを、誰かに出会うたびに話してくださった、松村艶子さんが昨年10月11日に亡くなりました。

いつもさつそうと公民館に現われた松村さん。憲法の講座で熱心に聞き入っていた松村さん。大好きな落語を大きな声で笑いながら楽しんでた松村さん。

誰に対しても公平で肩書きが嫌いで、組織より個人を大切に、常に一市民として行動されていた松村さん。民主主義を愛し、公民館を愛し、後に続く私たちの大きな目標になつてくださった松村さん。

私たちにたくさんさんの思い出と、社会の中で一市民として参加していくことの大切さを、行動で教えてくださったことを感謝しています。でもあなたに会えないのは、とても寂しいです。

(ひろく)

「なりたい私」になりた
小平市で初めての再就職準備セミナー

11月17日、小平市と(財)21世紀職業財団東京事務所との共催で再就職準備セミナーが開かれました。保育もついて17名の参加がありました。「私らしく再就職」するためには、「なりたい私」をはっきりさせることが必要だそうです。その

ために自分のよいところ(「お宅を書き出す作業をしました。好きなこと、できること、大事だと思っていること、これまでやってきたことなどです。この作業はあとで時間のある時にも書き足していきます。会場からは、「人をひきつける話し方を身につけたい」「再就職に向けての第一歩としたい」などの声が聞こえ、講師の山本由紀子さんは、「なりたい私」にな

りたいと思う強い気持ちが必要だと話しました。このセミナーには1週間後の出張力ウーグがついて、2名が参加しました。(谷原)



虐待を受けた子ども達のドキュメント「葦牙」
虐待から保護された子ども達が多く生活する「みちのくみどり学園」の日常を追った、「葦牙」が6月4日(金)ルネ小平で上映されます。ますます深刻になっていく児童虐待の問題を、子ども達自身がどうとらえ、そして彼らを囲む大人達がどうサポートしていくか。「ひとりでもつながって」いくために、わたしたちは何をすればいいのか、いろいろ考えさせてくれそうです。

小平在住の女性を訪ねて、そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。

いきいき
レディ24

病人であっても
同じ人間

伊藤 郁子 さんを訪ねて
(美園町、ケースワーカー)



旅行好き。旅先ではすぐ現地の人に
とけこんでしまう。

◆同じ人間なのに仲良くできない

伊藤さんが社会人になった昭和30年代は、多くの女性代議士が当選して新しい時代が来たように思われた。が、「売春

禁止法ができたなら、普通の女性たちが大変な目にあう」と発言して法案成立に反対する男性代議士がいる時代でもあった。外務省条約局や国際連合アジア極東犯罪防止研修所(府中)で働いた伊藤さんは、戦勝国ソ連との200海里に関するやりとりやアジアや国連から日本へ来る人たちのお世話を通して、同じ人間なのになかなか仲良くできない人々を目にしてきた。

20年前、精神科医の夫がデイ・ケア付きの精神科クリニックを開業するにあたり、伊藤さんも社会福祉学科で学生として、デイ・ケアを引き受けることになった。当時、精神科デイ・ケアは新しい医療の分野であり、精神科ケースワーカーもいない、暗中模索の時代だったそうだ。「たまたま、自由律俳句の中塚壇先生(中塚一碧楼のご令息)のお力をお借



◆「曇天の散歩道うつむき加減にそそと歩く」から「秋日和葉つばも風にゆれて」へ

「青空句会」で言葉を探して自分の気持ちや詠むことはコミュニケーションをとる練習になるそうだ。大きな声で自分の句を発表することも自信につながる。だんだん前向きな句が増え、やがて社会復帰の日が来るようだ。

格子の入ったおしゃれなドアがデイ・ケアの玄関だ。室内は喫茶店の雰囲気を残し、照明を暗くして気持ちが落ち着くようにしている。大きな机とキッチンがある部屋では、自由律俳句を詠んだり、壁新聞を作ったり、運動をしたりする。テニス、散策、カラオケ、料理教室もあり、メンバー、職員、ボランティアが全員参加する。病人であっても同じ人間。人間を大事にすることをモットーに、伊藤さんが作るこれらのプログラムは「とにかく楽し

いことばかりだ。「ドクターではない一人の人間」としてデイ・ケアメンバーと接してきた伊藤さんは、「これからも多くの人と会って、生きてきた道を語り合いたい」と話した。

先人の生きざま「海紅」に見た
みかんむく
郁子



精神科ケースワーカーは、精神的な病気あるいは心の病にかかっている人たちが、いかに社会に適応しその人なりの健康な社会生活を営めるように、どうすればよいか共に考え、時には、積極的にその個人にも社会にも働きかけていくことを仕事とする。(「心の旅路」から引用)
句会の作品は俳句の専門誌「海紅」に投稿している。また、作品集「心の旅路」(本文の句はこの本に掲載)「心は生きて」も出版されている。作品が選ばれて掲載されることは、デイ・ケアメンバーにとってとても励みになっている。河東碧梧桐も認める田島絹亮は伊藤さんの父。